

LSC NEWS LETTER

Learning Support Center 広島修道大学
学習支援センター

2025 No.41

広島修道大学
Hiroshima Shudo University

Contents

学習支援 SA (Student Assistant) の実際 … 1 特集 TA・SA … 2 第 80 回 LSC ドキュメンタリー・アワー開催報告 … 5
大学教育学会 第 47 回大会 参加報告 … 6 LSC 資料紹介 … 7 新任学習アドバイザー 紹介・〈学び★サブリ〉違和感の中にごそ「学び」がある … 8

学習支援 SA (Student Assistant) の実際

○ 経済科学部准教授 田中 藍子

広島修道大学数学ピアサポート Student Assistant (SA) として活躍していただいているのは、経済科学部の優秀な学生たちです。SA 事前研修では「答えを教えるのではなく、解法に導く」ことをお願いしており、学生が自ら考える力を育てるように努めています。SA は後輩たちに広島修道大学の建学の精神を体現する柔軟かつあたたかなサポートを続けています。

今年度前期は、統計学などサポート範囲が急激に拡大しました。昨年までとは様相が変化しながらも、SA は質問者と一緒に考え、類似問題から解法を導くなど地道な対応を続けています。SA の過度な負担を心配していますが、サポート学生は落ち着いた様子で対応してくれています。ときおり 8 号館 1 階の数学ピアサポートブースを訪れると、SA がヒントの少ない授業資料のコピーだけで質問者に対応している場面に遭遇することも少なくなく、適応力の高さに驚かされます。また、質問する学生も真摯に取り組み、高校までとは異なる大学での学びを徐々に身につけている様子が見てとれます。

今年度前期は授業でも SA にお世話になりました。私の担当科目は現代経済学科 1 年次のほぼ全員 + α が受講するため、教員 1 名では学生からの質問に対応しきれない場面が生じます。「教員が忙しそうだから」と受講者が遠慮してしまう状況は避けたいところですが、昨年度は対応が困難なときもありました。今年度前期は、昨年度同科目でよく質問し優秀な成績を修めた学生が SA として立候補してくれました。SA が洗練された分身のように作用し、今年度前期の授業はより充実しました。教員にはあまり質問しない受講生が SA に質問するという場面も見受けられ、

昨年度と比べて質問の質・量ともに向上しています。SA との事前打ち合わせでは「出欠など成績に関わる事柄はすべて教員に振ってください」とお願いしており、それ以外は本人の判断と事前研修で十分に対応できています。また、昨年度の授業アンケート結果と比べて、今年度は受講者の授業満足度が向上しました。

過去に、他大学の Learning Support Center (LSC) で 1 年ほど特定専門職員として勤務した経験があります。当時は主に理系研究科出身の職員や大学院生 Teaching Assistant (TA) が理工学系科目をサポートする体制でしたが、文系学生の利用はほとんどなく、課題に感じていました。

広島修道大学学習支援センターに携わって 1 年半が経過し、本学ではより効果的な運用がなされていると実感しています。レポートの書き方や英語の学習サポートに加え、数学系のサポートも整っています。しかしながら、新学部設置後は理系を対象とする数学系科目の難易度が格段に上がるため、学習支援センターとしての対応を検討する必要があると考えております。

本学の TA・SA 制度は、学生の学習支援という観点だけでなく、サポートする学生自身の成長にも大きく寄与しています。人に教えることで自らの理解も深まり、コミュニケーション能力や問題解決能力も向上します。これからも広島修道大学で学ぶ皆様がよりよく修められるよう、学習支援の取り組みがさらに充実することを願っております。



特集

ティーチング・アシスタント

Teaching Assistant

TA/SA

Student Assistant

スチューデント・アシスタント

本学では2024年度後期から本格的にTA・SA制度を導入し、今年度前期の終了で丸一年を迎えました。まだスタートしたばかりの制度ですが、TA・SAとして制度に関わってくれた学生は、実人数でTA 13名、SA 64名に上ります。

学生はTA・SAとして教員と共に授業に関わることになりますので、授業開始までに、まず学習支援センター主催の基本的な心構えや遵守事項についての研修を受けます。この研修では、教職員との円滑なコミュニケーション、受講生との良好な関係の構築、本分である学業との両立、自分自身の学びにも繋がること、等を重視していることを伝えています。

更に、授業の担当教員から、実際の授業で行うサポート業務についての具体的なレクチャーを受けた上で、TA・SAの活動に入ります。

活動前の幾つかの研修を終えた学生は、保つべき立場や相応しい振る舞いについて常に意識しながら業務にあたっていたことと思います。

そして授業期間終了後は、学習支援センター主催の振り返り研修を受け、自身が行った業務で上手くいった点や見つけた課題を、TA・SA同士でお互いに共有します。授業ごとに仕事の内容はかなり違いますが、参考にできる部分も各自で発見できているようで、どの学生も履修者のサポートをするんだという自覚をしっかりとって業務にあたってくれていたのを感じました。

授業の形態や内容は千差万別ですので、TA・SAの活動を一律に語るのは難しいことですが、今回の特集では、TA・SAとして活動した学生に、自らの経験を披露してもらいました。

過程の重要性を伝える



経済科学研究科現代経済システム専攻
博士前期課程2年
大久保 信繁

昨年9月から学部生の授業でTAを担当し、授業準備・補助や質問対応を行わせていただきました。TAとして学生と接するうちに、先生と学生の間にギャップを感じました。先生にとって授業は長年研究してきた専門分野であり、多くの学生にその魅力や重要性を伝えたいという思いがあります。一方で、学生の多くは「いかに効率よく単位を取るか」に関心を寄せているようです。実際、質問を受けた際にあえて答えではなくヒントを伝えたところ、「もったいぶっている」と受け取られたことがありました。経済学が日常生活や職業と直結しにくいという事情が、こうした姿勢を生み出しているのかもしれない。

経済学は「なぜそうなるのか」という過程を重視する学問です。勉強していると、直感的に受け入れにくい概念にも出会います。たとえば、価格の上昇とともに需要も上昇する財（ギッフェン財）や、生活必需品に高い税率をかけ

ることが効率的だとする考え方（ラムゼイルール）などです。こうした概念が多くを経済学者に支持されるのは、前提と論理の過程が妥当だからです。現実社会でも、結論だけでなく思考の筋道を説明することで、意見が受け入れられやすくなります。

このような現状を踏まえると、TAとして私が重視したのは単に知識を伝えるよりも、考える力を身に付けてもらうことでした。答えを教えるのではなく、理由と一緒に考えることで論理的思考の定着を促しました。将来、社内調整や交渉の場で道筋を立てて説明できれば、説得力のある対話につながるはずです。また、「経験的にはああすべきだが、経済学的にはこうすべきだ」と異なる視点から物事を考える力が身に付けば、より客観的な判断が可能になります。

もっとも、学生全員に時間をかけ過程から理解してもらうことは難しいのが現実です。また、授業に積極的な学生もいれば、最低限の単位修得を目的とする学生もいます。まずは学生がどの程度の前提知識や意欲を持っているのかを把握し、状況に応じて柔軟に対応することが大切だと感じました。過程を重視して深い理解を促すべき場面もあれば、暗記を中心にして短期的な成果を重視すべき場面もあります。学生一人ひとりに合った支援のバランスを探ることがTAの難しいところだと思いました。

支える立場で見つけた、新しい学び

商学部商学科4年
中島 采音

私は3年後期から4年前期にかけて、SAとして授業やゼミナールに参加しました。SAを始めるきっかけは、ゼミの担当教員である徐先生からお声がけいただいたことでした。授業を「受ける」立場から「支える」立場へと視点が変わること、これまで気づかなかった学びや発見を得ることができました。

私が担当したのは、徐先生の「マーケティング論」「ブランド戦略」、河内先生の「英語リーディング」、そして1学年下のゼミナールです。

授業によってSAの活動内容は様々でした。マーケティング論やブランド戦略のような大人数授業では、出席確認の補助やプリントの配布・回収、質問対応などを行いました。英語リーディングでは教室整備や資料配布に加え、自身の留学経験を学生に共有する機会もありました。また、ゼミナールでは授業サポートに加えて、株式会社イズミとの商品開発で得た経験をもとに、テーマ設定や価格、ターゲット設定の考え方などを後輩に伝え、学生ならではの視点の大切さを共有することで交流を深める場となりました。

活動を通じて良かった点は多くあります。まず、先生と学生の間に立つ立場だからこそ、先生の視点を知ることができた点です。また、先生に直接話しかけることに抵抗を感じる学生を橋渡しできたことは、役割の意義を強く感じました。自分が履修した授業を担当するため、学生に対してより具体的なアドバイスができましたし、ゼミナールでは同じ課題でも多様な意見や発想に触れ、自分自身も改めて学ぶ機会となりました。さらに、自分が受講した当時と比較して新たな発見があったことも印象的でした。

一方で、難しさを感じる場面もありました。特に、学生からの質問に必ずしも答えられるわけではなかった点や、授業にどの程度関わるべきか判断が難しい場面もありました。それでも、先生と相談しながら役割を模索した経験は、柔軟に対応する力を養うことにつながりました。

この活動を通じて大きな成長を実感できたのは、先生をはじめとする目上の方との信頼関係の築き方を学べたことです。また、学生に対して積極的に声をかけたり、アドバイスを伝えたりする中で、自ら行動する姿勢が自然と身につきました。

SAとして活動した経験は、学びを深めるだけでなく、他者を支える立場を経験することで自身の視野を広げる貴重な機会となりました。今後の社会生活においても、この経験は必ず生きていくと感じています。

SAとして何ができるのか

人文学部英語英文学科4年
岩崎 健太

私は2025年度前期、通訳演習Ⅰ（入門）及び通訳演習Ⅲ（同時通訳）の二つの授業にSAとして参加し、活動しました。昨年までは通訳コース生として教える立場でしたが、コース修了後に石塚教授からお話をいただき、SAを任せていただくことになりました。

私は教職課程を履修しているため教えることに苦手意識はなかったものの、通訳としての場数は石塚教授に遠く及びません。SAとして自分が何を教えられるのか、どのように授業に貢献できるのかを考えました。

通訳コース修了生といっても、別にプロの通訳者という訳ではありません。ただ私は幸運なことに、BFA U12アジア野球選手権での会議通訳や、カナダ女子野球代表の通訳スタッフなど、実際の通訳現場での業務を何度か経験させていただきました。学生として行った通訳業務の経験を伝えることで、受講生のモチベーションを上げることができると考えました。

「学問なき経験は、経験なき学問に勝る」という言葉があるように、授業をどれだけ真面目に受けていたとしても、実際に通訳の現場に出て、経験してみないとわからないことはたくさんあります。自分自身、初めての現場に行くまでは多くの不安がありました。そのような不安を抱く受講生が最初の一步を踏み出すための手助けになることができればと考え、授業に参加しました。

通訳演習Ⅰ（入門）では、授業内で行われる基礎トレーニングが実際の現場でどのように役立ったのかを説明することで、その重要性を認識してもらおうと共に、受講生が通訳現場とはどのようなものなのかということ具体的にイメージできるよう努めました。

通訳演習Ⅲ（同時通訳）では、受講生同士のロールプレイングを観察し、表現方法について議論するなど、一方的に教えるだけでなく、お互いの通訳スキルの向上を目指しました。自分にとっても逐次、同時通訳について学び直す良い機会になりました。

英語英文学科の特徴であり強みとして、学んだことを学外で活かす機会が多いということが挙げられると思います。通訳現場はもちろんそれにあたりませんが、アルバイト中などに通訳コースで学んだ表現に救われたことも何度もありました。

学んだスキルの活かし方は多種多様ですが、それを使って社会に貢献できたとき、人の役に立てたときの達成感はいずれも別格だと感じます。

今回SAを担当させていただいた通訳コース生のみなさんには、通訳コースで学んだことを大学内外問わず様々なシーンで発揮して欲しいと思います。

特集

支える立場から見た学びの広がり



国際コミュニティ学部地域行政学科4年
中村 環音

私は、国際コミュニティ学部の第1学期に開講された「ラーニングスキル」という授業で、スチューデント・アシスタント（以下、SA）を務めました。この授業は新生を対象に、論文やレポートの書き方、文献の読み方などを学ぶもので、大学生活の基盤を築く大切な機会です。私は授業が滞りなく進むよう、プリント配布や質問受付、提出物の回収などを行いました。

活動に先立ち、研修を受けました。SAの目的や立場について学んだ上で、受講生役とSA役に分かれて、ロールプレイを行いました。場面は、テストについて相談されたときや授業内容に関する質問を受けたときなどです。相手の意図を読み取ったり、答えを直接教えるのではなくヒントを伝えて導いたりすることと、その難しさを痛感しました。実際の授業では複雑な相談や質問は少なかったものの、「伝え方を工夫する意識」を持てたことは大きな収穫でした。

初回の授業は、私自身も緊張しましたが、新生はさらに不安そうでした。授業はワークシートとテキストを中心に、先生の講義と6～7名のグループワークで進められました。グループワークでは、初めは戸惑う様子もありましたが、初めて話す人が大半である以上、最初からうまくいかないのは当然です。回数を重ねるうちにコツが掴んだようで、それぞれのグループに特徴が出てきました。そこで気づいたのは、グループワークが活発かどうかは学びの質に直結するということです。伝える力、聞く力、そして相手の意見を引き出す力が相互に作用することで、より深い学び合いの場が生まれます。メンバー全員が積極的に関わろうとするチームでは議論が盛り上がり、授業の理解度も高まっているようでした。そうした様子を間近で見たことは、自分自身の学びにもつながりました。

これから卒業まで、研究論文の執筆や、プロジェクトの成果発表など、意見を交わす場に多数参加します。そこでは、SA活動を通して培った「伝える力」や「聞く力」は必ず役立つと確信しています。社会人になれば、それらのスキルは、より重要になっていくでしょう。SA活動での経験を、今後の学びと将来のキャリアにしっかりと結びつけていきたいです。

TA・SA制度と学生の成長支援

学習支援センター 明賀 萌

大変幸運にも私は、入職以来学生の支援ができる部署に配属され、学生の成長を見守ることができています。特に印象に残っているのは、教学センターの教職課程で支援していた学生にキャリアセンターへの異動後も引き続き就職支援をし、その次の部署である入学センターでは企業で活躍する卒業生として入試広報に協力してもらったことです。その卒業生は、広報で本学を「手を挙げれば様々なプログラムに参加できる機会があり、教職員からの熱い支援が受けられる大学。」と語ってくれました。これまで多くの学生に出会ってきましたが、時に迷いながらチャレンジし、苦難を乗り越えて成長していく姿はとても頼もしく、いつも眩しく感じています。

今年度学習支援センターに異動になり、2024年度に開始したばかりのTA・SA事業に携われることを大変光栄に思っています。2025年度前期は、36の科目等で41名のTA・SAが活躍しました。TA・SAを活用されている科目の公開授業では、SA学生がグループワークをフォローしている姿や、受講生のお手本として発表をしている姿などを間近で参観させていただきました。受講生とSA学生が信頼関係で繋がり、受講生が気軽に質問や相談をしたり、SA学生が積極的に受講生に声をかけ授業の雰囲気向上に貢献する姿に、様々な活躍の場や幅広い活用の可能性があると感じました。

このような素晴らしい活動に挑戦したTA・SAには、自信をもって成長したと実感して欲しいと考えています。また、事前の目標設定・事後の振り返りが、より活動の質を上げるのではないかと考え、現在以下のことに取り組んでいます。

一つ目は、経験の言語化です。活動後に勤務報告に来てくれる際には、困ったことはないか、どのような活動をしているのか、自分の授業や学習に支障はないか等毎回声をかけて話をするようにしています。自分の知識をわかりやすく伝えるために工夫していることや、「後輩のために自分ができる最大限のことをしてあげたい。」と話をしてくれる姿はとても輝いており、話をする中で自分の日々の成長や身についた力に気づいて欲しいと思っています。

二つ目は、目標設定、パフォーマンス評価をするためのルーブリック作成です。昨年度TA・SAの事後アンケートを確認することで、どのような成長が期待できるかを把握し、先生にも協力いただきながら評価の観点や到達目標を設定することができました。今年度前期の振り返り研修から試験的に導入しました。

TA・SAが安心して活動し、より成長を実感してもらえるように、私たちスタッフがができる支援は何かを日々考え実行していきたいと思っています。

第80回

LSC ドキュメンタリー・アワー開催報告

LSC ドキュメンタリー・アワーとは、本学の教員が自ら選んだドキュメンタリー映像を、教員の解説と共に視聴する企画です。取り上げたテーマに対する独自のアプローチに触れられる機会になっています。

ゲームと動画で学ぶ「ゲームと情報の経済学」

経済科学部准教授 永岡 成人



今回の講演では、互いの行動が互いの利得に影響を与える状況における意思決定について数学モデルを用いて研究する「ゲーム理論」を紹介しました。当日は、ゲーム理論の発展に貢献した研究者を描いた映像作品を視聴したり、実際にゲームをプレーしながら意思決定分析の考え方を体

験するとともに、ゲーム理論の経済分析への応用の話題をいくつか紹介しました。以下ではその概要を説明します。

まずは、ゲーム理論の基本的な考え方を紹介しました。例としてチェスやポーカーといったゲームを考えてみます。これらは複数人のプレーヤーたちがプレーするゲームで、行動の順番や自分の番でどのような行動を取ることができるか、プレーヤーたちの行動によってどのように結果（勝敗や得点）が決まるのかといったルールが定まっており、望ましい結果を得るためには相手の行動を考えながらうまく意思決定しなければならない状況になっています。経済や社会におけるさまざまな意思決定状況を考えたとき、ゲームと同様の構造になっているとみてゲームでの意思決定を分析するように経済社会での意思決定を分析してみよう、というのがゲーム理論による経済分析のアイデアです。

ゲーム理論では、意思決定者たちが互いに最適な決定を取り合っている状態をゲームの均衡点として注目して意思決定分析を行います。このようなゲームの均衡分析の理論の開拓によって、1994年にノーベル経済学賞を受賞した人物の1人がジョン・ナッシュ博士です。現在では「ナッシュ均衡」と呼ばれるこの考え方が提唱されたのは1950年頃で、ナッシュ博士がプリンストン大学の大学院生として博士課程で数学を研究していたことでした。今回の講演では、ナッシュ博士の大学院生時代から紆余曲折を経てノーベル経済学賞を受賞するまでを題材とした映画作品『ビューティフル・マインド』のうち、冒頭20分くらいの大学院生時代の場面を視聴しました。

次に、ゲームの均衡点を体験してみるために、参加者で実際にカードを用いたゲームをプレーしてみることにしま

した。今回プレーしたゲームは、ゲーム理論の古典的研究でも取り扱われたゲームで、ポーカーを単純化したようなゲームになっており、どのような手札を持っているかという情報を巡る駆け引きが結果を左右するものです。この単純化ポーカーはゲーム理論の解説書でも取り扱われることがあり、たとえば、川越敏司『はじめてのゲーム理論』（講談社、2012年）などに説明があります。先に述べたゲーム理論の基本的な考え方やナッシュ均衡についても解説されています。また、ポーカー用語については、松田道弘『トランプゲーム事典』（東京堂出版、1988年）が参考になります。

最後に、ゲーム理論の経済分析への応用をいくつか紹介しました。そのうちのひとつでは、経済主体の持つ情報によってどのような経済現象が発生するのかなどを研究する「情報の経済学」分野から、中古品の持ち主である出品者は品質をわかっているが買い手には品質がよくわからないときにどのような取引が行われることになるのか、という話題を取り扱いました。情報の非対称性によってうまく取引が行われなくなることを指摘したのは、非対称情報のもとでの市場取引の研究で2001年にノーベル経済学賞を受賞した1人であるジョージ・アカロフ博士ですが、その議論を意思決定する状況をゲーム理論のモデルとして定式化して意思決定を分析する方法で考察しました。他には、ゲーム理論を用いたメカニズムデザインの考え方を紹介し、ビジネスへの活用や社会問題の解決にゲーム理論が用いられている事例を紹介しました。

90分の時間でゲーム理論やナッシュ均衡の解説、映像作品の視聴、カードゲームのプレー体験、経済分析への応用など、多くの内容を取り扱いましたが、アンケート結果では有意義な内容で興味をもってもらえたという感想で、無事に講演を終えることができました。これまでの説明の中で紹介した図書や映像資料は大学図書館で閲覧することができますので、関心を持たれた方は手に取ってみてください。



ゲームをプレーする参加者

大学教育学会 第47回大会 参加報告

- 統一テーマ：大学生はどこで育っている？～学修を超えた学びと成長～
- 開催日：2025年6月7日(土)、6月8日(日)
- 会場：桐蔭横浜大学

学習支援センター次長 馬場崎 賢太

日本の大学進学率は57.7%を超えたという。大学という機関は、専門教育だけでなく、社会を機能的に支える人材輩出を担うべき場所であるということはもはや大学教育に携わる者の共通認識といえる。そのためには、学問の「縦」の学びと学生同士の「横」の学びをキャンパス全体でデザインしていく必要がある。今回の大学教育学会第47回大会への参加では、縦・横それぞれの観点から本学の学習支援センターの活動にとって意義深い取組を知ることができた。

学習支援センターでは、入学準備学習ワークブック、入学予定者のキャンパス学習、初年次教育科目におけるノートテイキングなどで学習アドバイザーによるアカデミックライティングの指導・助言を行っている。その際の添削・採点には膨大な労力がかかっており、その効率化は課題であった。今回の学会で参加した「生成 AI とループリックを組み合わせた新しいライティング評価 – 先行研究の紹介と体験セッションを通して –」（中央大学・尹智鉉他）、「オンライン・アカデミックライティング学習システムの可能性 – 高校教育から大学の学術文章教育に移行する際の課題とその効果 –」（Ronride株式会社・高山善光他）の発表では、生成AIを活用したライティング指導へのヒントを得ることができた。ライティングの評価は基準が複雑になりがちだが、生成AIとループリックを組み合わせた効果的な評価方法を体験を通して知ることができた。これらの運用によってセンターでのライティング評価活動はより効率的に行えると感じた。

また、本学では2024年度からTA・SA制度を開始し、学生同士の学びあいを促進している。「グループワークを効果的に展開するための工夫 – ICE MELTの提案 –」（関西大学・三浦真琴他）、「『準正課』に参加する学生の成長実感測定の試み – 京都産業大学の学生ファシリテータを事例として –」（京都産業大学・山野洋一他）、「大学におけるピアサポート組織において熱心にサポート活動に取り組む学生はなぜ『私は要らない子』という感覚を抱くのか：立ち上げ間もないピアサポート組織での調査を事例として」（石井和也）の発表では、TA・SAが授業の中で学修支援を行う際のファシリテーション活動例や、TA・SA活動を行っていく中で直面しがちな問題・課題を知ることができ、それらの実践例は制度の改善のために非常に有益だった。

学習アドバイザー 中村 大輝

本大会は桐蔭横浜大学で開催され、ラウンドテーブル、日本バドミントン協会会長の村井満氏らによる基調講演やシンポジウム、自由研究発表が行われた。本報告では、本学の学習支援センターにとって特に有用と感じた二つの発表について報告する。

「学びの契機として文章力の測定を活かす仕組み」（清泉女子大学・有田亜希子ら）では、データに基づく適切な学習支援を目指し、卒業論文の執筆に必要な文章力を初年次終了時点で直接評価する方法と、その実践結果が報告された。設問の具体例は本発表の中では示されなかったが、ループリック評価に基づいた評価方法と返却シートによる個別フィードバックが学生に比較的好意的に受け止められていることが示唆された。私が特に注目したのは、学生が求める学習支援を調査したアンケートにおいて「非対面での相談」や「匿名での相談」のニーズが高かった点である。本学でも、支援が本来必要な学生ほど学習支援センターやオフィスアワーを利用しない傾向があり、これは大きな課題であると私は考えている。この結果は、そうした学生にも届く支援の手がかりとなりうるものであり、本学の学習支援のあり方を再考する重要な視点の一つとなる発表であったと感じた。

また、「生成AIによる科目レコメンドシステムの学生・企業の共同開発とその検証 – 自己創生型のマイナーにおけるアカデミック・アドバイジングの補助的ツールとしての活用を目指して –」（新潟大学・斎藤有吾ら）では、学生の問題意識や関心に応じて適切な科目を推奨する生成AI搭載のレコメンドシステムの開発と運用結果が報告された。これは、Dify（ディファイ）というAI搭載アプリ開発ソフトとその言語モデルとしてOpenAI社のGPT-4o miniを用いたシステムで、プログラミング知識を特に必要とせず、容易に運用できる点が特徴である。シラバス記述の質が教員によって異なるため、適切に科目を案内できない可能性があることや、生成AIによるハルシネーションの問題など課題はあるものの、学生支援に生成AIを活用する先進的な実践事例として注目された。学習支援においても生成AIの活用は十分に可能性があり、より効果的な支援の実現に向けて、今後も生成AIとの適切な関わり方を私たちも模索し続ける必要があると感じた。



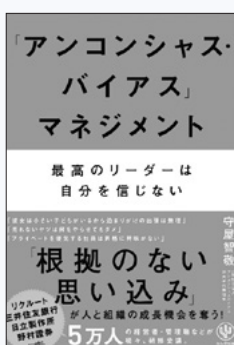
LSC 資料紹介

学習アドバイザー 村田 翔

学習支援センターでは、大学教育、初年次教育、アクティブラーニングや授業手法などに関する図書を収集しています。教職員には貸出もおこなっていますので、気軽に学習支援センターまでお問い合わせください。

『「アンコンシャス・バイアス」マネジメント 最高のリーダーは自分を信じない』

守屋 智敬著／かんき出版(2019)



人間は日常生活の中で、様々な経験や人との関わりを通して無意識のうちに自分なりの解釈を行い、考えや思い込みが生まれてきます。この無意識の思い込みが「アンコンシャス・バイアス」と呼ばれるものです。なぜ、このアンコンシャス・バイアスが生まれるのか、筆者は「脳がストレスを回避するために、脳が無意識のうちに、自分にとって都合のよい解釈をすることによって起きている (P.20)」と述べています。すなわち、無意識に自己防衛心が働き、捉える側が都合よく解釈してしまっているわけです。このアンコンシャス・バイアスは、誰もが持っているものであり、その思い込みへ対処していく必要があります。

本書は、主に組織のリーダーや管理職向けに執筆されたもので、アンコンシャス・バイアスが働くことで組織や個人にどのような影響を及ぼすのか、このアンコンシャス・バイアスとどう付き合っていくべきなのかが記されています。アンコンシャス・バイアスの中でも、職場における人間関係や仕事に影響するものと個人のキャリアや成長に影響するものがそれぞれ紹介されており、誰しもが持ち合わせている思い込みであると感じます。言い換えれば、管理職だけではなくどの立場の人間でもアンコンシャス・バイアスを無意識のうちに有しており、場合によっては他人に大きな影響を与えるものだという事です。本書で紹介されている事例の一つとして、インシュテリング効果があります。これは、慣れ親しんだ考え方や物事の見方に固執してしまい、他の見方に気付かない状態を指しています。この状態になると、新しい考え方が浮かばずこれまでの自分のやり方が一番だと思ってしまい、前例のない方法には非難してしまいます。そして、新たな問題解決方法やイノベーションが発生しにくくなる、多様性を失っ

てしまうなどの影響が発生することが考えられます。この状況は、多くの人が経験したことがあるのではないのでしょうか。これもアンコンシャス・バイアスによる影響の一つなのです。

このようなアンコンシャス・バイアスが現れるのをなくすために、筆者は自己認知力を高めることが必要だと述べています。例えば、相手の非言語メッセージを読み取ったり、相手を意のままに操ろうとしないことを意識したりするといったことがあります。すなわち、気付くことを意識する心のもちょうが必要だといえます。また、アンコンシャス・バイアスが発生しがちな言動もやめることが大切だと述べています。具体的には、価値観や能力の決めつけを示唆するような言動があげられています。さらには、各々が持つ意識の置きどころを変えることも対策の一つとしています。組織で物事を決定する際に、一部の情報のみで全てをわかったつもりになるのではなく、他の情報がないかどうかを検討することがよりよい組織づくりにとって、大切であると述べています。

そして、このアンコンシャス・バイアスに振り回されないような組織にするために、必要な考え方や対策が紹介されています。その中で特に重要だと考えたのは、リーダー自らが自己開示して心理的安全性を担保することです。先述したとおりアンコンシャス・バイアスが発生する要因は自己防衛が働くことによるものであり、そうなってしまうと職場の人間関係が上手くいかなくなりお互いの意見も交換できない状況になります。そこで、上司自らが心理的安全性を有していることを「大丈夫だよ」などと言葉で発することで、よりよい職場環境をつくることができます。

我々が生活するなかで、無意識のうちに生まれる思い込みであるアンコンシャス・バイアスが組織や人間関係など様々な影響を及ぼしてしまうのです。そのことについて再認識し、自分自身の考え方を見直す一冊となっています。

新任学習アドバイザー 挨拶

学習アドバイザー 中村 大輝



この4月から新たに学習アドバイザーとして着任いたしました、中村大輝と申します。これまでは中学校・高等学校で社会科の教員をしており、大学生と直接関わる機会はありませんでしたが、これまでの実践などをふまえて、皆さんの学びをサポートしていかれたらと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

教員として働いていたころや、学習アドバイザーとして勤務する中で、ありがたいことに「学生のころからできる人だったんでしょ?」と言っていただくことがあります。けれども、実際の私はまったくそんなことはなく、基本的にはめんどくさがり屋で気分屋。多くの人に迷惑をかけてきたのではないかと思います。そんな私がここまでやってこられたのは、先生方や友人など、今まで出会ってきた多くの方々に支えていただいたおかげだと、心から感じています。

だからこそ、今度は私が、誰かを支える側になりたいと思っています。大学生になると自分で考えないといけないうことや決めないといけないうことが増え、困ったり、迷ったりする時があると思います。そのようなときに、私は、かつて自分がしてもらったように一緒に悩み、考え、誰かの学びや挑戦をそっと後押しできる存在でありたいと思っています。

私自身、これまでの人生で支えてくれた人たちとの出会いが、自分を大きく変えてくれたと感じています。出会いは、道に迷ったときの支えになり、ときには自分では気づかなかった可能性を開いてくれることもあります。今はSNSなどを通じて人と簡単につながることができる時代ですが、その一方で、人間関係が希薄になってきているとも言われています。だからこそ、直接人と出会い、言葉を交わし、思いを分かち合うことの価値を、改めて大切にしたいと思っています。私自身も、ここでの出会いを一つひとつ大切にしていきたいと考えています。

私たち学習支援センターでは、レポートの書き方や英語学習など、大学での学びを支えるさまざまなサポートを行っています。ぜひ気軽に足を運んでください。皆さんとお会いできるのを楽しみにしています。

<学び★サプリ>

2025 Vol. 28

違和感の中にこそ「学び」がある

学習アドバイザー 藤田 香織

海外のユースホステルは、私にとって世界への窓でした。様々な国の若者と旅の感動を語り合う日々。そこで何度も耳にしたのが、「インドを旅すると世界観が変わる」という言葉。惹かれるままに航空券を手に入れました。

しかし、その期待は到着した瞬間、不安へと変わりました。空港の外には大勢の客引きや物乞いの子どもたち。頼んでもいない旅行会社に連れて行かれ、早々に騙されてしまいました。タージマハールへの期待は急速に失われていきました。

インドの街並みは想像をはるかに超えるものでした。ゴミの山から現れる大きな瞳の子どもたちがそこで生活する光景は言葉にならないほどの衝撃でした。人が生きる場所とは思えないほど不潔で危険な環境で幼い命が日々を過ごしていました。そのゴミ溜めがどこまでも続く風景にもショックを受けました。

人々の苦しい生活が広がる中に、豪華絢爛なタージマハールが突如現れ、私は強烈な違和感を覚えました。世界遺産と、そのすぐそばにある厳しい現実。このコント

ラストが、私がこれまで持っていた「美しさ」や「豊かさ」に対する価値観を根本から揺るがしたのです。

インドでの体験は、決して楽しいばかりではありませんでした。しかしそれは私に、「世界の現実は、自分の想像や価値観の範疇をはるかに超えている」という教訓を与えてくれました。

旅で出会う「不快」や「違和感」は、見ないふりをするのではなく、なぜそれがあるのか深く考えるきっかけになるのです。この旅は、私の世界観を壊し、より広い視点から物事を捉える力を与えてくれました。本当の「学び」とは、心地よい感動だけでなく、時にはショックや戸惑いを通じて得られるものだと思ったのです。

日々の英語学習は、新たな世界への扉を開く鍵です。学んだ英語を片手に、自分自身の価値観を揺るがすような新しい出会いを求めてみてください。見知らぬ場所へ一歩踏み出す勇気が、人生を豊かにする経験へと繋がるでしょう。

